

中国少数民族の民間信仰研究の変遷

— 彝族を事例に —

李 易宣*

キーワード

彝族、崇拜、民間信仰、彝族文化

目次

- | | |
|---------------|------------------|
| I はじめに | 3 2003～2012年 |
| II 研究目的と研究方法 | 4 2013～2024年5月現在 |
| 1 研究目的 | IV 考察 |
| 2 研究範囲 | 1 民間信仰研究の変遷 |
| 3 文献の抽出及び検討方法 | 2 問題点 |
| III 結果 | 3 今後の課題と展望 |
| 1 1978～1992年 | V おわりに |
| 2 1993～2002年 | |

I はじめに

中国は古くから多民族国家であり、宗教信仰の現状が非常に複雑である。改革開放後、少数民族に関する研究は活発化し、国の政策変化や社会的な要請に応じて顕著な発展を遂げてきた。特に近年では、民族文化保護政策や無形文化遺産保護政策の推進により、少数民族の文化や伝統の研究が注目されるようになった。これらの政策は、文化的多様性の維持と保護を目的とし、研究分野の拡大と深化をもたらした。このような背景のもと、中国の少数民族である彝族の民間信仰に関する研究も急速に進展している。

彝族は、中国西南部に広がる少数民族であり、独自の民間信仰や儀礼を保持している。彝族は主に雲南省、四川省、貴州省の三省に集中して居住しており、その中でも雲南省の彝族人口が最も多い。中国では少数民族の民族区域自治を保障するために、少数民族自治州が設けられている。彝族の自治州には、雲南省の楚雄彝族自治州、紅河哈尼族彝族自治州、四川省の涼山彝族自治州などがある。彝族は中国の少数民族の中でも

特に独自の文化と言語を持ち、その習俗、言語、宗教、社会構造は居住地域の歴史や文化的アイデンティティに深く根ざしている。このため、彝族の民間信仰を研究することは人類学や社会学、言語学など多岐にわたる学問分野において重要な知見を提供する。彝族研究は中国の多様な文化的風景を理解する上で不可欠である。さらに、彝族の居住する地域の地域開発や教育の改善、健康増進などの社会問題に対する解決策を模索する上でも重要である。

また、彝族の民間信仰は日常的な農耕活動から祭祀の儀式に至るまで、文化的・社会的生活のあらゆる側面に深く影響を与えている。自然現象への感謝を表すために季節ごとの祭りや祭祀が行われ、これらは地域の繁栄と安全を保障する重要な手段となっている。彝族の信仰体系は自然と人間の相互作用を通じて形成され、自然との調和と共生を目指す生活様式や価値観を反映している。したがって、自然信仰や祖霊信仰などの民間信仰を理解することは、彝族文化を深く理解する上で不可欠である。民間信仰は、特定の教団や教義によって形成されたものではなく、地域のコミュニ

* 名古屋大学大学院

ティや家族の間で自然発生的に伝承・実践される信仰形態である。それは、その地域の自然環境、歴史、社会構造、文化的背景に深く根ざしており、地域特有の信仰対象や祭祀、儀式を含んでいる。さらに、民間信仰は日常生活と密接に結びついており、季節ごとの祭り、農作業、出産、結婚、死などのライフイベントにおいて顕著に表れている。地域や生業に応じた多様な信仰形態を有し、これらの信仰が相互に作用しながらコミュニティの世界観を形成している。したがって、民間信仰に関する研究は文化人類学において重要な位置を占めている。

彝族の信仰体系は、中国の少数民族文化における典型的な特徴を多く有している。彝族の民間信仰は、宗教儀礼、祭り、神話などが複雑に絡み合い、地域や集団ごとに異なる側面を持ちながらも、共通する信仰体系がその基盤に横たわっている。このような多様性と普遍性を兼ね備えた彝族の民間信仰の研究は、中国における少数民族信仰研究の変遷を理解するために不可欠であり、少数民族文化全体の動態を捉えるための重要な手がかりとなる。さらに、彝族は中国の少数民族の中でも人口が多い民族の一つであり、他の54の少数民族と同様に、彝族に対する研究は中国の政治、政策、社会、経済といった多方面からの影響を受けてきた。彝族の民族信仰に関する研究の変遷を追うことによって、中国における民間信仰研究の発展過程をある程度反映することができるであろう。本稿では、彝族の民間信仰研究を事例として取り上げ、1978年から2024年5月現在までの彝族の民間信仰研究を年代順に整理し、中国少数民族の民間信仰研究の変遷と今後の課題について検討する。

II 研究目的と研究方法

1 研究目的

中国の少数民族政策は、少数民族研究に対して多大な影響を与えてきた。中国の彝族研究は、時期ごとに大きく四つの段階に分けることができる。第一段階は19世紀半ばから1920年代にかけてであり、この時期には海外からの旅行家や伝教士が彝族の人口、起源、経済状況、宗教文化及び風習などを記録した。これらの記録は、主に「旅行記」あるいは「探検記」の形式を取っている。第二段階は1920年代から1949年までであり、この期間は中国の少数民族研究が海外で相次いで発表され、中国国内では初めての少数民族研究

ブームが訪れた。この時期には、楊成志、丁文江、凌純声、庄学本、徐益棠、高伦、林耀華、雷金流、馬学良、陳宗祥といった中国人学者が西南少数民族地域を訪れ、フィールドサーベイを行った。彝族の宗教文化やシャーマニズムに関する調査もこの期間に行われた。第三段階は1950年代から1970年代であり、中華人民共和国の成立直後は政治的、社会的なさまざまな要因により、中国国内でのフィールドサーベイやフィールドワークの実施は困難であり、少数民族研究はほぼ停滞した状態であった。第四段階は1978年以降であり、30年ぐらいの停滞期を経て、中国国内において彝族を含む中国の少数民族研究の黄金時代が訪れた。彝族研究は彝族の歴史、起源、文化、宗教、言語、文学、芸術、服飾などさまざまな分野で活発に行われた。

1978年以前、彝族に関する研究は主に外国の伝教士などによる旅行記や探検記、または国家や政府機関の依頼による調査に基づいたものであり、民間信仰の研究は、あくまで民族文化の一部として整理され、信仰そのものの多様性や地域ごとの特徴が十分に反映されることは少なかった。そのため、民間信仰に関する独立した研究は非常に少なかった。1978年に改革开放政策が始まると、中国の少数民族研究の姿勢も大きく変化した。民間の学者による彝族の民間信仰に関する研究が急増し、この分野は本格的に研究の対象となるようになった。民族の多様性が再評価され、少数民族文化に対する理解が深まった。この時期、特に民間信仰に関する研究が急増したのは、社会の変化に伴い、民族の伝統的信仰に対する再認識が進んだためである。本稿では、少数民族研究の「黄金期」と呼ばれる1978年から2024年5月現在までの第四段階に焦点を当て、この期間に発表された中国西南部に居住する少数民族である彝族の民間信仰に関する研究論文をレビューの対象とし、年代順に整理・分析を行う。このプロセスを通じて、研究動向の変遷を明らかにし、文化人類学の視点から現在存在する問題点を指摘する。また、今後の課題を模索することを目的としている。

2 研究範囲

今井(1940: 306-307)は民間宗教の範囲について「民間信仰は如何なる構成を持つかと言へば、第一は組織宗教以外の宗教的信仰であり、第二は組織宗教の習合されたるもの即ち組織宗教は曲解され、混淆され、變化されたるものである」と述べた。民間信仰は、その

範囲が広大であり、日常生活の細かな事柄から自然界の日月星辰に至るまで多岐にわたっている。これらの信仰は、日々の実生活に深く根ざし、さまざまな形態で存在している。その基盤となるのは、主に民間に伝わる口承伝説や、それらに基づく創作された文書や説話などである。

この広範囲に及ぶ民間信仰を研究する際、まずその分類が重要な課題となっている。複雑かつ多様な民間信仰の現象を一定の視点で分類することは、相当な困難を伴う。今井（1940）は民間信仰、超人間的威力の信仰を「呪力」、「精霊崇拜」、「神の信仰」に分類した。民間信仰の範囲、傾向、性格は、その最も原始的な段階での呪術や呪物に関連する呪力、予兆、縁起などの力への信仰から始まる。宗教と呪術は文化現象の一部として、人間によって創造されたものであり、文化の基礎として適切である。この観点から、すべての文化活動は外界に対する優越、獲得、利用であり、宗教の意義は積極的な経験価値の獲得と解釈される。今井による分類法は、抽象的な信仰体系を具体的な形で体系化する点において顕著である。

民間信仰の範囲について桜井（1968: 17）は①「中核的領域を形成する、原始素朴な民族信仰の系譜をもつもの」、②「仏教やキリスト教など外来宗教の伝来とその伝播土着化の過程において派生してきたもの」、③「人間の行動を規制する予兆や、禁忌に関する対応の仕方、さらに呪法や占術を通して展明する信仰機能」と述べた。

中国の「民間信仰」の内容について直江（1987）は中国の民間信仰は、原始的な信仰を中心にしていながら、その内容は極めて多様で雑多な特徴を持っていると述べている。これには、祖霊や死霊、地域の神々、職業に関連する神々、勧請神、聖地や祟り地などの信仰が含まれる。また、憑依現象、禁忌、予兆、占いなどの呪法や、さまざまな民間療法、妖怪、幽霊などの俗信もこの範疇に入ると主張している。

王（1997）は、「民間信仰」を「民間宗教」と見なし、社会人類学の観点からその範囲を次の四つに分類している。①神、祖先、鬼に対する信仰、②民間祭祀の場所「廟」などで行われる祭祀、年間祭祀、人生儀礼、③血縁に基づく家族及び地域の廟における儀式組織、④世界観と宇宙観を象徴する体系である。

また、李（1992）は、民間信仰が日常生活に密接に結びつきやすく、体系化された經典や具体的な組織を持つ教会システムが欠如している点を指摘し、民間信仰の主体は「民衆」、対象は「神、祖先、鬼」であると主張している。さらに、李（1997）は、民間信仰を祖先崇拜、神明崇拜、季節祭儀、農耕儀式、占ト・風水、符咒法術¹に分類し、いずれも信仰と儀式の二つの要素から成り立っていると述べる。林（1991）は、信仰対象に基づき、民間信仰を祖先崇拜、人鬼信仰、神明信仰、自然信仰、巫術信仰に分類している。

以上の先行研究を踏まえると、民間信仰の研究範囲は「信仰の内容と信仰対象」、「実践と儀式」、「象徴」、「組織」の四つの側面から構成されると考えられる。第一に、信仰の内容及び対象には神霊、鬼怪、祖先、自然、さらには風水、運勢などの神秘的な力が含まれる。第二に、信仰の実践及び儀式には、人生儀礼や祭祀、徳を積んで運命を変える行為、さらには神霊との交流が含まれる。第三に、信仰の象徴として、廟、神像、自然物、施設が挙げられる。第四に、信仰の組織に関しては、儀式の主催者が代表的な存在となる。これらの側面すべてを本稿の研究対象としたい。

3 文献の抽出及び検討方法

現在、彝族の民間信仰に関する研究は、主に中国国内で実施されており、国際的な研究は依然として不足している。この状況を踏まえ、本稿では中国国内で発表された論文を中心に文献調査を進めた。論文の選定には、中国のオンラインデータベースであるCNKIを使用した。中国語において「信仰」の用語に加えて、「崇拜」や「宗教」といったキーワードも民間信仰に関連する文献検索に広く用いられるため、より包括的な調査を目指し、これらのキーワードを含む検索を行った。具体的には、第一段階で「彝族信仰」、「彝族崇拜」、「彝族宗教」をキーワードに設定し、学術刊行物に掲載されている論文から選定を行った。この過程で、タイトルから明らかに民間信仰とは無関係なものと重複を除外し、693件の論文が特定された。第二段階では、これらの論文の中から、タイトルから研究対象が服飾や観光などといったような民間信仰以外のものを中心とする研究を除外し、138件に絞り込んだ。最終段階では、論文の内容から、研究の焦点が「彝族の民間信

¹ 「符咒法術」とは神秘的な力を持つとされる文字や図形が書かれた紙などと呪文・まじないを用いた呪術のことである。

仰である」かどうかを基準に据え、研究目的の明確さと信頼性、妥当性を検証した結果、最終的に52件の論文をレビュー対象として選抜した。

III 結果

本稿では、少数民族研究の発展を理解するために、1978年以降の歴史的転換点を基準とし、研究の展開を四つの時期に区分する。この期間区分の根拠は、中国共産党の重要な会議や国家出席の交代、またはそれに伴う少数民族文化政策の変遷にある。以下のように各時期の期間と特徴を整理した。

①1978年～1992年。1978年12月、中国共産党第十一期中央委員会第三回全体会議（通称：三中全会）において、改革開放政策の実施が決定された。この政策転換により、中国では少数民族文化の保護政策が次々と打ち出され、それが少数民族研究の発展に大きな影響を与えた。「新中国成立以来、我が党の歴史において深遠な意義を持つ偉大な転換を実現した（実現了新中国成立以来我们党历史上具有深遠意義的偉大転折）」と評価されている（中共中央党史研究室 2011: 1038）。翌年2月には、民族宗教分野における冤罪や誤判の再審が行われ、5月には中国国家民族委員会が天津で改革開放後初となる委員拡大会議を開催した。この会議では、「各民族自治地域及びその他の民族地域の経済・文化状況及び課題の調査研究を強化するべきである（加強对各民族自治地方和其他民族地区經濟、文化狀況和問題的調查研究）」（国家民族事務委員会 1990: 11）と指摘され、これにより国家が民族文化に対する関心を高めたことが示され、現代民族文化研究の始まりが告げられたといえる。この時期は民族政策の調査研究が強化され、少数民族政策の整備・充実が進められたことから、この時期を「少数民族研究の再出発期」と位置づける。

②1993年～2002年。中国共産党第十四回全国代表大会では中国が社会主義市場経済体制の構築段階に入ったことが明確に示され、少数民族文化に関する方針と主要な任務が発表された。具体的には、少数民族

文化の権益を守ること、少数民族の伝統文化を保護すること、そして少数民族文化産業を発展させるための政策や措置が策定された。1993年、江沢民が国家主席に就任し、市場経済への移行が本格化した。この期間、政府は少数民族の社会的、文化的な多様性を尊重する方針を強化し、少数民族の経済的発展や教育水準の向上を目指す政策を導入した。一方で、経済改革と都市化の進展に伴い、少数民族地域における社会環境は大きく変化した。都市部への人口移動が加速し、少数民族の伝統的な生活様式や文化が外部の影響を受けながらも、地域ごとの特色が維持されるような状況が生まれた。劉（2014: 181）はこの時期を中国における少数民族文化政策の「整備・充実（健全・豊富）」の時期であったと評価している。この期間は、「市場経済移行期における少数民族文化保護政策の充実期」と位置づけられる。

③2003年～2012年。中国共産党第十六回全国代表大会では、「小康社会²」の建設と「社会主義調和社会³」の構築が目標として掲げられた。これにより、少数民族文化政策がさらに体系化され、少数民族文化の振興策が積極的に進められた。2003年、胡錦濤が国家主席に就任し、「社会主義調和社会」の実現を目指す政策が推進され、中国における少数民族政策はさらに大きな転換を迎えた。この期間、政府は経済発展と社会の安定を最優先事項として掲げ、少数民族政策においてもその方針を強化した。特に、少数民族地域のインフラ整備や教育機会の拡充、産業振興が重要な課題として取り組まれた。これにより、少数民族の生活水準は向上し、地域間格差の縮小が進められたが、その一方で、都市化の進行に伴い伝統的な農耕社会からの移行が急速に進み、少数民族社会の構造は大きく変化した。少数民族政策においても「文化のさらなる繁栄（文化更加繁荣）」が強調され、民族文化の発展が積極的に進められた。この期間は「社会主義調和社会の構築と少数民族文化政策の体系化期」と位置づけることができる。

④2013年～現在。2013年以降、習近平体制のもとで民族文化政策の重視が一層強まり、「中華優秀伝統

² 中国共産党が掲げた国家発展目標の一つとして位置づけられ、国民全体が比較的安定した豊かさを享受できる社会を意味している。

³ 中国共産党が提唱した社会の安定と持続可能な発展を目的とする国家ビジョンであり、経済成長のみならず、社会的公平・正義・法治・道徳・環境保護など、より包括的な社会のあり方を目指す概念である。

文化の弘揚（弘揚中華優秀伝統文化）⁴」が国家戦略として掲げられた。民族問題への関心が一層高まり、「優れた伝統文化の継承体系の構築（建設優秀伝統文化伝承体系）」「少数民族特有の文化保護活動の推進（開展少数民族特色文化保護工作）」「少数民族文化事業の発展（繁栄發展少数民族文化事業）」「中華優秀伝統文化の弘揚」「優れた伝統文化の継承体系の構築」や「少数民族特有の文化保護活動の推進」など、より具体的

な文化政策が打ち出された。特に、少数民族文化の保護・継承に関する政策が体系的に整備され、民族文化事業の発展が加速した。この期間を「民族文化政策の深化期」と位置づける。

以上の四つの時期区分に基づき、それぞれの期間における主要な研究成果と議論の動向を概観し、詳細な分析を行う（表1）。

表1 文献の概要と分類（筆者訳）

	著者（発行年）	テーマ（日本語訳）	出典	概要
①	嵯光電, 余宏模 (1982)	涼山彝族的原始宗教信仰 (涼山彝族の原始宗教信仰)	『貴州民族研究』(03): 135-147。	大小涼山地域における彝族の原始宗教信仰が概観されている。四川と雲南の境界に位置するこの地域は、複雑な自然環境が特徴であり、彝族はここで長い歴史を通じて、厳しい自然環境に対抗するための労働と共同体の知恵を発展させてきた。トーテム崇拜や精霊崇拜、自然崇拜、靈魂崇拜、祖先崇拜といった多様な信仰形態が複雑に絡み合い、宗教的な実践が展開されている。
②	何耀華 (1983)	試論彝族的祖先崇拜 (彝族の祖先崇拜についての試論)	『貴州民族研究』(04): 153-168。	中国が古くから多民族国家であり、民族の社会的進展には均一性がなく、宗教信仰の現状が非常に複雑であることが示されている。彝族の祖先祭祀を多角的に分析することによって多民族国家中国における宗教信仰の多様性と複雑性を再認識することが可能であると論じられている。多数派によって支配されがちな国家において、多くの少数民族が古代の宗教的信仰を継承し、あるいはその変容形としてこれを現代まで持続させていることが指摘されている。
③	徐銘 (1990)	涼山彝族祖先崇拜及其社会功能 (涼山彝族の祖先崇拜とその社会的機能)	『西南民族学院学报（哲学社会科学版）』(2): 19-23。	涼山の彝族は、氏族の血縁組織を基盤とした社会であり、家族や氏族の繁栄と系譜の継承を支える信仰体系として祖先崇拜を発展させてきたと述べられている。その中で、故人は死後も家族や氏族内での役割を保持し、祖先崇拜の実践を通じてその影響力を継続させているとされている。祖先崇拜の社会的機能としては、生産的機能、凝集的機能、道徳的機能、教育的機能、娯楽的機能の五つに分類されている。
④	羅巫研 (1991)	彝族血崇拜刍議 (彝族の血の崇拜についての考察)	『貴州民族研究』(04): 50-53。	彝族は神霊が神聖なる血液を持つと同時に、血を食物とする存在であると考えられている。生理的重要性を超え、血液に対する特別な感情が生まれた血への崇拜が、神話、タブー、民間伝承、言語、宗教を通じて伝えられてきたとされる。神霊は血に対して極めて独占的であり、他者との共有を許さないと論じられている。
⑤	余立梁 (1999)	試論楚雄彝族的土主崇拜 (楚雄彝族の土主崇拜についての考察)	『楚雄師專報』(04): 90-95。	彝族の土主信仰はアニミズム観念の下に形成された自然崇拜から発展してきたものであるとされる。自然物や生物に霊性を見出すトーテム崇拜、祖先崇拜、英雄崇拜など、多様な信仰と崇拜の形が含まれていると記述されている。

⁴ 出典：2006年10月19日「中国中央關於構建社会主义和諧社会若干重大問題的決定」『人民日報』中華民族が長い歴史の中で培ってきた優れた文化的遺産を保存・継承・発展させ、現代社会に適應させながらその価値を高めていくことを意味する。特に現代中国においては、国家の文化的自信を強化し、社会主义文化建設を推進するための重要な方針として掲げられている。

	著者(発行年)	テーマ (日本語訳)	出典	概要
⑥	馬廷中 (2000)	彝族古代原始宗教信仰浅論 (彝族的古代原始宗教信仰について)	『貴州文史刊』(01): 37-42。	彝族の原始宗教信仰が自然崇拜、神々への崇拜、そして特に祖霊信仰を含む複合的な形態をとっていたと述べられている。祖先崇拜は、彝族の信仰体系の中で中心的な位置を占めており、その重要性は彝族の古代文献にも反映されているとされる。彝族の祖先崇拜は外来宗教に浸透されず彝族の原始宗教が古代社会から近世に至るまで存在している理由として、彝族地域の生産力レベルの低さ、社会分業の未発達、地域を統一する政治政権の最高権威が現れなかったことなどの社会経済的な要因が挙げられている。
⑦	陳永香 (2002)	論彝族的火崇拜 (彝族的火の崇拜について)	『楚雄師範学院学報』(02): 56-56。	火への崇拜が彝族の日常生活の諸相に顕著に表れているとされる。多くの儀式や祭事は火をめぐって展開される。彝族における火は、善悪をもって区別され、善良な火は繁栄をもたらし、邪悪な火は災難を引き起こすと認識され、火が邪気を払い、病と災厄を癒す力を持つとの信仰が彼らに根強く存在するとされる。生者が火を通して祖先に祈りを捧げ、祖先がその繁栄を見守るという信仰は、金沙江流域を中心とする彝族文化の核心的要素となっていると述べられている。
⑧	楊甫旺 (2002)	口頭神話与民間信仰——雲南彝族馬櫻花神話個案研究 (口承神話と民間信仰—雲南彝族の馬桜花神話を例として)	『柳州師專学報』(04): 127-130。	口承神話と民間信仰が不可分の関係にあり、互いに影響を及ぼしあい、識別が困難であるとされる。雲南彝族の馬桜花に関する神話は、原始信仰と密接に関連し、自然崇拜、トーテム崇拜、生殖崇拜、祖先崇拜、英雄崇拜など複数の信仰段階を経て形成され、口承神話が民間信仰を継承・延長し、民間信仰が口承神話を再生・強化し、最終的に神聖な領域から人々の日常へと還元されていると指摘されている。
⑨	黄河 (2003)	試論彝族神話与原始宗教 (彝族的的神話と原始宗教についての試論)	『昆明大学学報』(02): 21-24。	彝族の神話と原始宗教が初期氏族社会の共通意識形態として発生し、初期段階で一体となっていた統一意識形態を構築していたと主張されている。時の流れと共に、彝族の神話と原始宗教はそれぞれが独自の特性を持ちながら発展し、分化していったとされる。彝族の神話が伝説に変わる過程で、原始宗教も人為的な宗教へと進化した、特定の地域の彝族民間信仰の形成に寄与したと論じられている。
⑩	牛軍 (2003)	彝族的死亡觀与祖先崇拜 (彝族的の死生觀と祖先崇拜)	『民族芸術研究』(03): 48-54。	彝族の死生觀及び祖先崇拜の精神性について強調されている。彝族は、死後人が先祖のもとへ帰るという觀念を持ち、時間や空間の次元を超えた生と死、生死の輪廻、魂の永続という抽象的な概念に基づき、祖霊信仰を構築しているとされる。このような信仰は、生と死が相補的な関係にあるという彝族の世界觀を反映していると記述されている。
⑪	陳永香 (2006)	彝族史詩“梅葛”所見的原始宗教信仰 (彝族的史詩「梅葛」に見られる原始宗教信仰)	『宗教学研究』(04): 140-145。	彝族の史詩「梅葛」が彝族原始宗教信仰の基盤であり、彝族の原始宗教信仰が「梅葛」という史詩によっていかに体现され、継承されてきたかを詳細に分析した。畢摩は、この史詩の主要な保存者、伝承者、利用者であり、その中で神話、伝説、歴史が融合し、彝族文化のコミュニティ内で共有されると主張されている。
⑫	陳永香, 吳永社 (2006)	論彝族的山神崇拜 (彝族的の山の神の崇拜について)	『楚雄師範学院学報』(02): 66-72。	山の神という概念の形成、畢摩による儀礼、崇拜の文化的内容といった側面から、彝族の山の神の崇拜を探究し、各地域の彝族において山の神の崇拜は、その原始宗教信仰の中で一般的なものであり、自然崇拜の中核的要素と捉えられていることが述べられている。
⑬	鮑惠新 (2007)	彝族民歌中的原始宗教信仰 (彝族的の民謡から見た原始宗教信仰)	『雲南財貿学院学報 (社会科学版)』(01): 17-18。	彝族の民歌が原始的宗教信仰の普及、内容の充実、保存、伝播の媒介としての機能を果たし、これらの民歌は物質的生産の促進と精神生活の豊かさへの寄与に加え、彝族の先祖の歴史、習俗、心理を記録し、文化の継承者へ伝える役割を持っていること述べられている。

	著者(発行年)	テーマ（日本語訳）	出典	概要
⑭	楊甫旺 (2007)	彝族土主崇拜研究 (彝族的土主崇拜研究)	『雲南師範大学学報（哲学社会科学版）』(01): 49-55。	彝族における土主崇拜は、彝族の生殖崇拜、トーテム崇拜、及び先祖崇拜の融合であり、さらに、人間中心の宗教である仏教や道教の影響も受けた複合文化としての性格を有し、彝族の土主崇拜は、家畜の安全、風雨の調和、五穀の管理といった機能を持っていることが指摘されている。
⑮	張純徳 (2007)	彝族原始宗教再認識 (彝族的原始宗教への再認識)	『畢節学院報』(03): 19-22。	彝族の原始宗教は、先人たちの長い社会生活の蓄積として形成された原始的かつ地域固有の民族信仰であり、彝族文化に対する再認識の必要性を主張していた。さらに、彝族原始宗教の特徴を再定義し、その生成、性質、内容、体系を整理した上で、宗教儀礼や畢摩の活動、彝経研究を通じて、これらの宗教現象を体系的で代表的なものとして再構築するべきであると考えられる。
⑯	李世康 (2008)	論彝族天神 (彝族の天神について)	『楚雄師範学院学報』(08): 58-63。	彝族の天神信仰は、古代から現代に至るまでの異なる文化的背景を持つ民族における普遍的な信仰形態として存在すると述べている。彝族における天神崇拜は、「天人感応」や「天人合一」といった哲学的概念を生むまでに発展し、自然崇拜から祖先崇拜、そして人格神崇拜へと進化してきたとされる。
⑰	劉忠良, 鄧明輝 (2008)	俚濮彝族原始宗教信仰調查——以啊喇么村為個案 (俚濮彝族的原始宗教信仰の調査研究——啊喇么村を例として)	『攀枝花学院学報』(02): 29-32。	彝族の宗教形態は原始宗教の高度発達の際にあつて異なる地域はそれぞれ独特の特色を持っており、攀枝花市仁和区の白娜古村、啊喇么村の俚濮彝族はトーテム崇拜、自然崇拜、先祖崇拜などの面で独自の特色を持っていることが確認された。しかし、これらの原始的な宗教文化現象にはさまざまな問題も存在するため、適切な指導と彝族の物質的及び精神的文化生活の改善を図るべきであると提唱されている。
⑱	洛迦木果, 沙馬打各, 吉木阿龍 (2008)	支格阿魯文化中的宗教信仰 (支格阿魯文化における宗教信仰)	『西昌学院学報（社科版）』20(04): 97-101。	支格阿魯文化が古代彝族文化の一環として、原始宗教の体系に属していることを明らかにされている。彝族の原始宗教信仰は、自然崇拜、トーテム崇拜、アニミズム、祖先崇拜、靈魂、鬼や妖怪への信仰といった多岐にわたる要素から構成され、畢摩たちは、神々の力を借りて人々の健康や平安、繁栄を願い、悪霊を払う役割を果たしていると述べられている。
⑲	羅国藁 (2009)	彝族“羅羅”虎崇拜 与民族精神 (彝族「ロロ」の虎崇拜と民族精神)	『畢節学院学報』(27): 27-30。	彝族は虎を力と権力の象徴と見なし、先祖や部族の守護神として崇拜し、虎は彝族文化の核心に位置し、日常生活や祭祀活動において中心的な役割を担っているとされる。この虎崇拜は、彝族のアイデンティティや集団的記憶、そして精神力の源泉としての機能が強調されている。
⑳	曲比阿果 (2009)	凉山彝人火文化的传承与变迁 (凉山彝族の火文化の传承と变迁)	『西南民族大学学報（人文社科版）』30(06): 53-57。	凉山地域における彝族の火の信仰の传承と变迁は彼らの生活環境及び宗教信仰と密接な関連を有し、彝族における火に関する理解や禁忌は、社会及び自然に対する深い理解と畏敬の念を映し出しているとされる。現代における彝族火文化の新たなテーマ並びに挑戦となっていると指摘されている。
㉑	顏麗花, 趙岩社, 張小娜 (2009)	彝族祭祖儀式及社会功能 (彝族的祖先祭祀儀礼とその社会的機能)	『懷化学院学報』28(09): 11-13。	彝族は多数の支系を持ち、長い歴史と豊かな古代文化を有しており、彝族の祭祖の儀式は各支系の文化を探究するにあたって最も直接的な材料を提供し、彝族の祖先祭祀の大典は、祖霊信仰の宗教行事としては最も重要なものであり、彝族の宗教、哲学、歴史、民俗、倫理及び文学に関わる広範な文化的要素を反映しているとされる。その祭祀は彝族文化の進化において複数の社会機能を担っており、彝族の生活において不可欠な役割を果たしていると指摘されている。
㉒	黄龍光 (2010)	試論彝族火神話与火崇拜 (彝族的火神話と火崇拜についての試論)	『畢節学院学報』28(01): 25-31。	火に関する神話や習慣が彝族の民間信仰における重要な内容であり、その本質を形成し表現していること、またその持続性と再生力が世代を超えて彝族社会に浸透していることが明らかにされている。

	著者(発行年)	テーマ (日本語訳)	出典	概要
②③	蔡富蓮 (2011)	涼山彝族民間信仰中の少女鬼——“妮日” (涼山彝族の民間信仰における少女鬼「妮日」)	『宗教学研究』(03): 159-164。	涼山地域における彝族の民間信仰中の中に「妮日」という少女鬼が存在する。「妮日」は人々をしばしば困らせる悪霊であり、その結果、人々から呪いや追放の主要な対象とされているという。「妮日畢」の儀式で使用される主要な経文の翻訳と彝族の民間文学、民間で盛行する民俗事象の分析を通して、涼山彝族の「妮日」に対する信仰は、少女や処女崇拜の名残であると考えられる。
②④	李金堯 (2011)	浅析彝族村寨中的“車神”信仰 (彝族村寨における「車神」信仰についての分析)	『学理論』(36): 174-175。	塔冲村における民間信仰に関する調査により、彝族においても新たな信仰対象である「車の神」とそれに伴う儀式が確認され、彝族が構築した神々の世界には、祖先の神々のみならず、天地山河にまつわる自然の神々が存在し、これらは彝族人の生活の隅々に影響を及ぼしている。しかし、職業や物品に関連する特定の神々、例えば「車神」といった存在は、従来の信仰体系には含まれていなかったことが明らかにされている。この発見は、伝統的な信仰が現代の社会文化的変遷に対応し、発展していることを示していると考えられる。
②⑤	龍保貴 (2011)	彝族原始宗教神枝文化略考 (彝族の原始宗教神枝文化に対する考察)	『畢節学院報』29(11): 38-44。	彝族の原始宗教における畢摩の信仰活動が、樹枝と密接な関係にあることが確認されている。彝族の祭礼の中で、神座や神枝陣が設置されるのは、神秘的な力を通じて邪悪な霊を排除し、亡くなった人々の魂を浄化すると同時に、祭りが滞りなく進行し成功することを願っている行為である。神枝図や神座図は宇宙の構造を象徴し、彝族の文字の起源とその発展にも大きな意味を持っていると論じられている。
②⑥	楊甫旺 (2011)	論彝族魂鬼觀念 (彝族の魂鬼觀念についての考察)	『宗教学研究』(01): 161-165。	彝族にとって「鬼」とは、人を病気にさせたり、怪我をさせたり、死亡させるすべての悪霊のことを指しており、彝族の民間には、自然界の鬼、祖先鬼、病名に基づく鬼、白鬼、突然死の鬼、及びその他さまざまな鬼が存在し、鬼に対する人々の態度は、恐怖と崇拜両方あり、彼らをなだめ、追い払うための手段をとる場合もあれば、その保護も求める場合もあると述べている。
②⑦	張澤洪 (2011)	中国西南彝族宗教祖靈崇拜及多元信仰体系 (中国西南彝族の教、祖先崇拜及び多元的信仰体系)	『宗教学研究』(04): 186-192。	中国西南地区に居住する彝族の宗教現象に関する詳細な分析を行い、特に、歴史、人文、地理の各観点から彝族の宗教信仰の背景が分析されている。彝族の歴史と、漢文資料と彝族自身の文献をもとに、彝族の祖靈崇拜の特徴や、その多元的な信仰体系を描いたと述べられている。
②⑧	張毓雄, 姚順波 (2011)	彝族民間信仰中森林文化的認同与差異——基于貴州農村460份調查問卷分析 (彝族民間信仰の森林文化の認同と相違——貴州農村における460のアンケート調査に基づく分析)	『湖南科技大学学報(社会科学版)』14(04): 102-108。	貴州省の農村における調査から民間信仰における森林文化が民族の起源と歴史を反映していることがわかった。この文化は、自然に対する熱愛と崇敬の感情を示すものとして機能し、各民族固有の祭りや信仰の特色を際立たせていると述べられている。
②⑨	廖玲 (2012)	談彝族史詩“梅葛”与彝族宗教 (彝族の史詩「梅葛」と彝族宗教について)	『宗教学研究』12(03): 230-236。	中国西南部の少数民族文化における重要な史詩である「梅葛」に対する学術的関心を背景に展開された。「梅葛」が演じられる民俗、その地域の宗教文化の背景、そして彝族の宗教的心理を充足させる活動の意義について論じられている。
③⑩	施麗娜 (2012)	浅析滇南彝族的傳統節日——祭龍 (滇南彝族の伝統的な祭り——龍祭りについての分析)	『佳木斯教育学院学報』(02): 62。	雲南彝族の伝統祭りである龍祭りを取り上げ、その特徴や意義について分析を行い、龍祭りが彝族の文化的アイデンティティにおいて中核をなす儀式であると述べる。龍祭りは彝族の宗教観、世界観、及び自然に対する深い敬意と信仰を反映していると主張されている。

	著者(発行年)	テーマ（日本語訳）	出典	概要
③①	楊甫旺, 李娜 (2012)	論彝族猎神崇拜 (彝族的狩猎神崇拜 についての考察)	『宗教学研究』(2): 243–247。	彝族の自然崇拜が日常生活の諸相に反映され彝族の人々は日々の生活の中で、自然物や自然現象に深い敬意を持ち、それらを神聖とし崇拝する習慣を有している。彝族にとって狩猟は生存手段であると同時に霊的な次元も有しており、狩猟の神への崇拝は、彼らの日常生活と自然界との相互作用の中で形成された文化であると指摘されている。
③②	趙蕤 (2012)	万物有霊和祖先崇拜 ——中国彝族与日本 靈魂觀比較 (万物有霊と祖先崇 拝——中国彝族と日 本の靈魂觀の比較)	『貴州民族研究』(206): 73–77。	彝族の原始宗教と日本の神道との間にアニミズム観念と祖霊信仰という二つの共通点が見られるとされる。彝族は家系や家族の重要性を強調し、日本人も集団意識に根差した靈魂觀を持っているが、その背景にはそれぞれ異なる文化的、宗教的理由が存在する。彝族においては、靈魂が個人の生前から存在し、その人の本質と捉えられるのに対し、日本では人の死後に靈魂を重んじる特有の依存心理が反映されている。また、これらの宗教觀は道教とも深い関連性を持っていると述べられている。
③③	花家涛 (2013)	彝族村寨火把節“火 ——祖——捧”的文 化解讀 (彝族村落における火 把節の「火——祖—— 捧」文化について)	『上海体育学院報』37(01): 67–70。	史書や伝説から彝族の火の祭りの三要素と言われる「火——祖先一投」という三つの要素が解讀されている。古代には、「火と始祖」を祭る「火の祭り」で、「絡み合い一投げ」という儀式的な相撲を行い、「種族の継続」を祈願し、「生殖崇拜」の観念を象徴していたと主張されている。
③④	楊甫旺 (2013)	文化傳播視野中的彝 族宗教信仰 (文化傳播学の読点 から見る彝族の宗教 信仰)	『宗教学研究』(02): 151–156。	彝族の原始信仰について、自然崇拜、トーテム信仰、祖霊信仰、土主信仰などの形態を取りながら、原始的な巫術文化の特徴を保ちつつ、儒教、仏教、道教といった多数の文化要素を取り入れている。さらに、民間の靈の信仰と共に、儒仏道の三教も信奉されており、彝族と漢族の民間信仰、多元的な信仰の共存と融合の文化現象だと示されている。
③⑤	羅布木呷, 王靖 (2014)	凉山彝族畢摩文化伝 承現狀的調查与思考 (凉山彝族的畢摩文 化の伝承と現狀に関 する調査と考察)	『文山学院報』(37): 41–47。	畢摩文化は彝族宗教の核心であり、中華民族の伝統文化の重要な構成要素であると強調されている。社会經濟の発展に伴い、畢摩文化はかつてない危機に直面しており、特に市場の縮小と畢摩の収益が不十分であることが、畢摩の人数の急激な減少と儀式の内容の消滅を引き起こしている中、文化継承の困難という課題に対して、畢摩文化の保護と継承のための戦略が提案されている。
③⑥	高金和, 李小梅 (2015)	永仁彝族的山神信仰 ——以永仁県迤帕拉 村為例 (永仁彝族的山の神 信仰——永仁県迤帕 拉村を事例に)	『牡丹江大学学报』(8): 168–170。	迤帕拉村を例として、村落、家族、祖先三つの側面から彝族の山の神信仰を考察し山の神の祭祀活動は、家庭や家族、さらには村全体の結束力を高める効果があり、彝族人が重んじる「人と自然との調和」の思想を体現し、「清吉平安」を祈り、神霊と先祖からの保佑を求める彝族人の純朴な願いを反映していると主張されている。
③⑦	龍保貴 (2015)	試析彝族傳統神靈系 統及其文化特点与特 质 (彝族的伝統的な神 靈系譜及びその文化 特性についての考 察)	『貴州工程応用技術学院学报』33(06): 41–47。	彝族は南西部に居住する多神教の民族であり、アニミズムの認識を持ち、彝族の信仰体系は、天、地、水域及び地下の神々、並びに祖先の神々を崇拝する文化であり、大きく天神、地神、人祖神の三つに分類することができこの神の権力構造は、彝族の伝統社会の階級構造と同質のものであり、互いに反映し合うものであると述べられている。
③⑧	潘興德 (2015)	畢摩文化对当代彝族 人信仰的影響 (畢摩文化が現代彝 族人の信仰に与えた 影響)	『人民論壇』(17): 207–209。	畢摩文化は、彝族の人々と畢摩が共同で創造し、伝承してきた宗教文化で、祭祀の際、畢摩は祭司として経を誦読し、祭祀用の供物を媒介とし、法器、経典、儀式を用い、畢摩が所有する「畢摩文献」と呼ばれる文字資料の内容は、宗教、哲学、風習、天文、暦、歴史、地理、倫理道德、医学など、彝族文化の多様な側面を網羅していると述べられている。

	著者(発行年)	テーマ (日本語訳)	出典	概要
③⑨	吉差小明 (2016)	彝族典籍『阿黑西尼摩』の宗教信仰 (彝族の典籍『阿黑西尼摩』に見られる宗教信仰)	『湖北函授大学学报』29(21): 188-189。	『阿黑西尼摩』は彝族の宗教的な信仰と文化的伝承の媒介で、この典籍の中心人物である「西尼摩」は、神性と人性を有する女性であり、彝族の始祖として崇拝され、彼女の物語は、彝族の神話、宗教信仰、畢摩文化の精神的な核心を包括し、多彩な民俗信仰を織り交ぜながら、彝族の信仰体系の伝統と精神性を伝達していると主張されている。
④⑩	劉禎, 蘇濤 (2016)	撮泰吉: 祭祀化的祖先崇拜与形象化的彝族生命史詩 (撮泰吉: 祭祀化的祖先崇拜与形象化的彝族生命史詩)	『遺産与保護研究』1(06): 62-67。	撮泰吉は彝族文化における祭祀演劇としての長い歴史と神秘性を有するものと位置付けられ、撮泰吉の祭祀は、多様な信仰と文化の交錯する表現形式であり、その継承された祭祀活動は彝族伝統演劇の起源を示唆するものと考えられる。
④⑪	単江秀 (2016)	文化生態視野下楚雄彝族的耕作与信仰 (文化生態学の視点から見た楚雄彝族的農耕と信仰)	『楚雄師範学院報』31(11): 84-91。	楚雄地区の彝族の農作と信仰に関する研究が行われ、生業と生活様式が人々の知識体系、価値体系、信仰体系に決定的な影響を与えている。彝族という少数民族は、山岳民族として乾田農法を固守しつつ、水田での稲作文化をも受容し、それに伴う信仰体系を構築しており、生活環境に適応した信仰を形成していると述べられている。
④⑫	蘇斐然 (2016)	彝族民間故事中的信仰文化述略 (彝族の民間物語における信仰文化の概説)	『楚雄師範学院学报』31(08): 46-51。	彝族の神話や民間物語が原始宗教的信仰をどのように反映しているかについて詳細な分析が行なわれた。これらの物語において、自然現象への崇拝が顕著であり、宗教信仰に直結する多様な要素が見られ、彝族の先祖たちの世界観や洞察力が具現化されたこれらの信仰文化は、中国文化の多様性や発展に寄与しているだけでなく、人類の精神文化の多様性と繁栄の一端を示していると指摘されている。
④⑬	吳秋林, 郎麗娜 (2016)	彝族宗教“三靈”研究 (彝族宗教の「三靈」に関する研究)	『宗教学研究』(04): 151-158。	彝族の祖先は、靈魂の不滅を信じており、肉体が減じた後も、靈魂は死ぬことがなく、三つの異なる形態で存続する。一つの靈は先祖の起源地に向かい、一つの靈は遺体と共に埋葬され、墓を守護し、もう一つの靈は祖先の「位牌」に宿り、後代の祭祀と供養を受けて子孫を守護する。彝族の「三靈」やその具体的な靈魂の形態は、彝族の先祖が遊牧から徐々に農耕へと移行する過程での産物であると指摘されている。
④⑭	李小燕, 高樂坤 (2017)	彝族祖靈筒与祖靈信仰探析——以貴州盤県坪地鄉彝族鄉為例 (彝族の祖靈筒と祖靈信仰についての分析——貴州盤県坪地鄉彝族鄉を事例に)	『貴州工程応用技術学院学报』35(05): 49-53。	祭祀の時に使う祭祀道具の「祖靈筒」は彝族の祖靈信仰における物質文化の象徴であるとされる。この祖靈筒の形状や製造方法、神性の取得に至るまでのプロセスや祭りの流れは、遊牧文化と農耕文化の融合であると考えられる。
④⑮	劉榮昆 (2017)	彝族樹木崇拜的多元文化意涵及其鄉村治理功能 (彝族の木の崇拝が持つ多元的文化意味と地域管理機能)	『貴州師範大学学报 (社会科学版)』(06): 47-53。	彝族は木への崇拝の多元的文化的意義とその村の統治機能について述べている。彝族における木の崇拝が自然との調和、安全の追求、美の探究などといった機能を持っているとされる。
④⑯	李開春, 楊甬旺 (2018)	神性与世俗: 彝族山神崇拜与生態保護——以雲南縣華彝族山神崇拜為例 (神性と世俗: 彝族の山の神崇拜と生態保護につい)	『西昌学院学报 (社会学版)』30(02): 11-14。	山の神の崇拝は、彝族の原始信仰の基盤であり、山の神は彝族の中で最も古く、最も大きな神であり、山の神の崇拝は、伝統的な信仰の形式であり、自然の崇拝やトーテムの崇拝とは異なるとされる。しかし、それは厳格な意味での正統な宗教信仰でもなく、神性と世俗性を兼ね備えており、人々と自然との間に平衡のとれた規則を築き上げていると論じられている。

	著者(発行年)	テーマ（日本語訳）	出典	概要
④7	楊海燕 (2018)	彝族松樹崇拜及其文化意義——以楚雄彝族自治州為例 (楚雄彝族自治州を例にした彝族の松樹崇拜とその文化的意義)	『文物鑑定与鑑賞』(10): 60-61。	彝族の松の木崇拜が古来より継承される習俗であり、現代における彝族の生活にも依然として影響を及ぼし、彝族の民俗活動を通じて表現される信仰や、災害を避けるための祈願は、伝統的な信仰が現代社会においても生き続けている証拠であると述べられている。
④8	殷鷹 (2018)	簡論彝族民間信仰中的龍崇拜 (彝族の民間信仰における龍の崇拜について)	『楚雄師範学院学報』33(05): 127-133。	「諾蘇澆」、「納蘇澆」、「戛蘇澆」など龍の部族を自称とする彝族集団が、彝族人口の50%以上を占めるとされる。龍は、中華民族の文化的アイデンティティにおいて核心的なシンボルであり、彝族文化において、龍の祭祀儀式は一般的かつ重要な慣習であると指摘されている。
④9	周芸芳 (2018)	彝族宗教祖靈觀的文化分析——以当代彝族詩歌為中心 (彝族の宗教祖靈觀の文化的分析——現代彝族詩歌を中心に)	『宗教学研究』(01): 161-166。	彝族の現代の詩に反映された彝族の祖靈觀を解析し、彝族の先祖は超自然の力の存在を信じ、解釈できない自然現象を神靈の支配によるもので、彝族の人々と神靈との関係が非常に緊密であると考えてきたとされる。現在、彝族の民間信仰は祖先崇拜を中心に、多神教の宗教体系を形成されている。彝族の詩人の作品には、祖靈の觀念が影響を与えており、詩人たち独自の生命觀や死の意識、倫理精神が形成されていると主張されている。
⑤0	商宇宏 (2019)	微觀視角下的彝族小眾支系信仰文化——彝族密岔人植物崇拜遺跡調查研究 (ミクロ視点から見た彝族の少人数支系の信仰文化——彝族密岔人の植物崇拜の遺跡に対する調査研究)	『貴州工程応用技術学院学報』37(06): 54-59。	密岔地域の彝族の植物崇拜が自然万物の靈魂への崇敬に根ざしていることを述べている。彼らは線香を焚き、祈りを捧げることで靈的存在からの助けを求め、特定の植物に対する敬意は、宇宙の秩序や祖先、災厄回避、穀物の神々への信仰の具現化としての意味合いを持っていると述べられている。
⑤1	栗小寧 (2019)	彝族虎図騰崇拜及其背后的文化邏輯分析 (彝族虎トーテム崇拜とその背後にある文化ロジックの分析)	『文化学刊』(6): 119-120。	彝族における虎のトーテム崇拜とその文化的背景について考察を行い、彝族は虎を強さと権力の象徴として尊重し、祖先及び部族の図騰として崇拜し、この崇拜は、「万物有靈」の觀念に根ざしており、日常生活や服飾デザインに具現化されている。
⑤2	龍保貴 (2022)	彝族傳統神鬼魂信仰及其文化意蘊 (彝族の伝統神鬼魂信仰及びその文化的意味)	『楚雄師範学院学報』37(06): 93-100。	彝族の伝統的な神鬼魂信仰を「自己を守る」「他者」「自己に属する」の三つに分類・整理され、神鬼魂信仰彝族の民間信仰の中核となり、神と鬼、神と魂、祖先と神、神鬼魂が同一体であるとともに、彝族の伝統的な神靈の階層構造は古代彝族社会の階層制度を基盤として構築、強化、継続されてきたものであると論じられている。

1 1978～1992年

文献数は4件であった。①は大小凉山地域における彝族の原始宗教信仰を概観していた。この地域の彝族社会は、中華人民共和国の成立前に長きにわたり社会生産力の進展が顕著に停滞していた。その社会的基盤を支えていたイデオロギー、特に宗教は、原始宗教的信仰を保持していた点が特徴である。具体的には、トーテム崇拜や精霊崇拜、自然崇拜、靈魂崇拜、祖先崇拜といった多様な信仰形態が複雑に絡み合い、宗教的な実践が展開されていた。これらの信仰は、彝族の精神文化の形成において重要な役割を果たし、自然環境や

社会構造との相互作用を通じて、独自の宗教觀を發展させてきたとされていた。②と③は祖先崇拜に関する研究であった。「歴史的源流」、「靈魂不滅の信念」、「祖先の靈魂を慰める葬儀」、「祖先靈への祭祀」、「社会への影響」といった観点から彝族の祖先祭祀を多角的に分析されていた。このように、祖先祭祀の分析を通じて、多民族国家中国における宗教信仰の多様性と複雑性を再認識することができると指摘した。③は、凉山彝族における祖先崇拜について、地方民族資料を用いて分析を行ったものである。この研究では、祖先崇拜が家族集団の存続と安全を守り、構成員の精神的安定

を図るための信仰として機能している点が明らかにされていた。また、この信仰は、祖霊への解釈や信仰、さらにこれに伴う禁忌を基盤としていた。社会的機能としては、生産的機能、凝集的機能、道徳的機能、教育的機能、娯楽的機能の五つに分類され、その価値は家支制度の安定を一定程度促進している点にあると指摘されていた。④では、血液崇拜が彝族信仰体系の中で独自の文化的要素として注目され、特に古代彝族社会においては、自然崇拜やトーテム崇拜、祖先崇拜などの原初宗教が広く行われていた中で、血液崇拜が重要な地位を占めていたことが指摘されていた。この信仰は、生理的な重要性を超え、血液に対する特別な感情が形成され、それが神話やタブー、民間伝承、言語、宗教を通じて伝えられてきたことを示していた。

2 1993～2002年

文献数は4件で彝族古代の宗教信仰の包括的な研究と彝族の土主崇拜⁵や火の崇拜、植物信仰に関する研究であった。⑥では、彝族信仰の重要な特徴の一つとして、全民族的に統一された至高神を持たない点が挙げられていた。この信仰体系は、「万物有霊」の観念を基盤とし、自然崇拜、トーテム崇拜、祖先崇拜など多様な宗教形態を含む原始宗教の段階にあるとされた。これらの信仰形態を個別に分析しつつ、彝族原始宗教信仰の核心を祖先崇拜、特に祖霊崇拜に位置づけ、祖先崇拜は、彝族文化の中核をなす重要な宗教的概念であると結論づけていた。特定の信仰を対象に⑤は、楚雄市に居住する彝族の土主崇拜に焦点を当てていた。この研究によれば、楚雄市の彝族は交通の閉塞、経済発展の遅滞、物質文化基盤の弱さといった要因により、多神崇拜や信仰習俗を現代まで維持してきた。土主崇拜は石の神、樹の神、英雄崇拜の三種類に分類され、その起源は「万物有霊」という観念に基づき、自然崇拜、トーテム崇拜、祖先崇拜、英雄崇拜が統合され簡略化されたものであるとされていた。⑦では、彝族が「火の民族」として知られる理由が、生活の中で火が中心的役割を果たしていることにあると述べて

いた。特に「火塘（囲炉裏）」は祖先崇拜と密接に結びつき、祖先と現世の子孫を繋ぐ精神的な媒介とされていた。生者が火を通して祖先に祈りを捧げ、祖先がその繁栄を見守るという信仰は、金沙江流域を中心とする彝族文化の核心的要素となっている。⑧は馬櫻花に関する神話を分析し、この神話が自然崇拜やトーテム崇拜など複数の信仰段階を経て形成されたことと、民間信仰と口承神話が相互に影響を与えながら継承され、最終的に神聖な領域から日常生活へと還元されるプロセスを指摘していた。

3 2003～2012年

文献数は24件でその中で彝族の民間信仰に関する包括的な分析を行い、彝族の信仰体系を全体的に理解することを目的とした研究が8件、特定の信仰に焦点を当てる研究が16件であった。

⑨、⑪、⑬、⑲は歌、神話、文学から見られる民間信仰に関する研究であった。⑨は彝族の神話と原始宗教が相互に深い関係を持つことを示していた。この中で、口承史詩「梅葛⁶」や民族学・民俗学の資料に基づき、最古の神話が動物トーテムに由来することが明らかにされている。神話は宗教的な「神」としての役割だけでなく、原始宗教における「神」としても機能し、初期氏族社会において神話と原始宗教が統一された意識形態として存在していたことが指摘されていた。⑪では、「梅葛」が彝族原始宗教信仰の基盤であることが述べられ、その中に神話、伝説、歴史が融合している点に注目していた。この史詩は畢摩⁷によって保存・伝承され、彝族コミュニティにおける宗教文化や宗教的心理に大きな影響を及ぼしてきた。また、史詩が宗教的民俗として演じられることが地域文化における宗教的意味を強調していた。また、⑲も「梅葛」が演じられる宗教的民俗、その地域の宗教文化の背景、そして彝族の宗教的心理を充足する活動の意義を分析していた。⑬では、史詩の中には神話、伝説、歴史が融合しており、これが彝族文化の共有と継承を支える役割を果たし、民謡を通じて彝族の信仰の核心がアニミズ

5 彝族における「土主」は、特定の土地、特に村落・耕地・山林などを守護する霊的存在であり、その多くは国の開拓祖や村の始祖、またはその土地に縁の深い霊魂が神格化されたものとされる。

6 「梅葛」は彝族の重要な史詩であり、彝族の創世神話から始まり、部族の起源、英雄の冒険、神々との関係、社会の秩序や倫理規範を詠っている。この史詩は、彝族の畢摩によって世代から世代へと口頭で伝えられ、特定の儀式や集会の際に語られることが多い。

7 畢摩とは中国の少数民族彝族の宗教儀式において重要な役割を果たす宗教職であり、伝統的な信仰体系の中で深い精神的かつ社会的な機能を有する人物である。畢摩は、一般的に祭祀儀礼や神聖な儀式において、彝族の人々を指導し、神々と先祖とのコミュニケーションを担うとともに、社会的な規範や道徳の維持にも関与している。

ムや祖先崇拜など多岐にわたることも指摘されていた。

⑮と⑱は古代彝族の原始宗教信仰に関する研究であった。⑮では、歴史的に支配階級による少数民族への差別が存在し、漢文文献が支配階級の視点から「我が民族にあらざる者、その心必ず異なり（非我族類、其心必異）」という観点で書かれていることを指摘していた。このため、彝族文化に対する再認識の必要性を主張していた。さらに、彝族原始宗教の特徴を再定義し、その生成、性質、内容、体系を整理した上で、宗教儀礼や畢摩の活動、彝経研究を通じて、これらの宗教現象を体系的で代表的なものとして再構築すべきであると論じていた。この研究は、従来の宗教学研究と比較して理論的な高度性を有しており、少数民族の原始宗教研究における重要性を強調していた。一方で、彝族の原始宗教に関する研究は依然として少なく、さらなる研究が必要であると述べられていた。⑱では、自然崇拜、トーテム崇拜、アニミズム、畢摩文化、スーニ文化が、古代彝族宗教において「支格阿魯」⁸文化にどのように反映されているかを分析していた。

⑰と⑳は特定の地域の民間信仰に関する研究であった。⑰では、雲南省楚雄州北部に位置する「啊喇么村」を事例に、彝族の民間信仰を考察していた。同地域の信仰は、トーテム崇拜、自然崇拜、祖先崇拜といった独自の特徴を持つが、しかしながら、これらの原始宗教的文化現象には課題も多く存在する。そのため、適切な指導と彝族の物質的・精神的文化生活の改善が提唱されていた。㉑は歴史、人文、地理の視点から彝族の宗教的背景を分析していた。漢文資料と彝族自身の文献を比較し、祖霊崇拜が彝族信仰の中核を成していることを明らかにしていた。また、宗教体系の多元性も検証され、祖霊信仰を中心に自然崇拜やトーテム信仰といった多様な要素が共存していることが示されていた。これらの多元性は、彝族文化の柔軟性及び異文化への適応能力を反映していると述べていた。

特定な民間信仰に焦点を当てた研究の中で、⑩、㉒と㉓は彝族の祖霊信仰に関する研究であった。⑩は彝族の死生観に焦点を当て、死が祖先との再会であるとする信仰が中国文化の「葉落归根」の思想と一致していることを指摘していた。この考えは、祖先崇拜と結びつきながら、魂の不滅性を強調していた。㉒では祖

先祭祀が彝族における最も重要な宗教行事として位置づけられ、その宗教的・社会的な役割が詳細に論じられていた。魂の不滅性に基づく信仰において、祖先祭祀は魂を鎮め、送り出すための壮大な儀礼として、宗教的・娯乐的・政治的機能が複合的に絡み合う場とされ、祖先祭祀は彝族文化の宗教的特徴を体現するものであると指摘した。彝族の祖先祭祀の大典は、祖霊信仰の宗教行事としては最も重要なものであり、彝族の宗教、哲学、歴史、民俗、倫理及び文学に関わる広範な文化的要素を反映していると述べていた。彝族は一般的に、祖先は肉体の死後も魂が不灭であると信じている。その信仰において、魂は生前には身体に宿り、死後は独立した存在となるが、三つの魂が異なる帰属地を持つとされていた。一つの魂は火葬場または墓地を守り、もう一つは家の祖先霊位に宿り、最後の一つは祖先の発祥地に帰る。このような祖先信仰の象徴的实践として、彝族の祖先祭祀が挙げられた。この祭祀は、祖先の魂を鎮め、送り出すための壮大な儀礼であり、準備、安霊、送霊の三段階に分けられる。また、祖先祭祀には社会的機能として、宗教的儀礼のみにとどまらず、娯乐的要素や政治的な役割も含まれる。これらの機能が複合的に絡み合うことで、彝族の宗教文化の特徴が形成されていると指摘していた。㉔は、彝族の原始宗教と日本の神道を比較し、両者のアニミズム観念や祖霊信仰の類似点と文化的背景の違いを明らかにしていた。

㉕は山神崇拜が彝族の生活環境に根ざしていることを示し、その信仰構造を祭司による儀礼や文化的内容の側面から考察していた。この信仰は自然への畏敬と共生を象徴しており、彝族の生活文化に深く組み込まれていた。㉖では、土主崇拜が生殖崇拜やトーテム崇拜と融合し、仏教や道教の影響を受けた複合的な文化現象であることが述べられていた。㉗は天神信仰が彝族文化の普遍的な形態として存在し、古代から現代に至るまで継続している点を指摘していた。㉘は虎の崇拜が彝族のアイデンティティ形成に果たした役割を分析していた。虎は力と権力の象徴として尊重され、祖先や部族の守護神として位置づけられていた。史詩「梅葛」には、虎が宇宙の構造を象徴する存在として描かれており、彝族文化における虎の重要性が確認されていた。

⁸ 支格阿魯は、彝族全体で認識される最も著名な英雄であり、彼にまつわる口承伝承（神話、伝説、物語、英雄叙事詩）、歴史文献、畢摩經典、さらには彫刻や絵画、音楽、舞踊などの芸術作品を包含する包括的な文化体系として位置づけられている。

②⑤と②⑧は植物信仰に関する研究であった。②⑤は「神枝図」や「神座図」が宇宙の構造を象徴し、彝族文字の起源や発展にも重要な意味を持つことを示し、畢摩による信仰活動において重要な役割を果たしていると述べていた。②⑧は貴州省の農村におけるアンケート調査を通じて、森林文化が民間信仰を通じて民族の起源や歴史をいかに反映しているかを考察していた。

②⑩と②②は火の信仰に関する分析を行っていた。②⑩では、涼山地域の彝族における火の崇拝が、住居や宗教儀礼など生活のあらゆる側面に影響を及ぼしている点が強調されていた。火は神聖で生命を持つ存在と見なされ、その特別な地位が彝族文化全体を支えていると主張していた。②②は彝族社会では火が神聖視され、多くの地域で祭祀の対象となっている。火の崇拝は、毎年旧暦6月24日に行われる「火祭り」を通じて表現される。この祭りは、豊穡の祈願と火への敬意を象徴する行事であり、彝族にとって最も重要な祭典の一つであると述べていた。

②③と②⑥は鬼霊信仰に関する研究であった。②③では四川省涼山における「妮日」という少女鬼への信仰が、少女や処女崇拝の名残であると考察されていた。②⑥は彝族社会には自然界の鬼や祖先鬼など多様な鬼霊が存在し、人々は鬼に対して崇拝と恐怖の両面を持つとされた。

③⑩は雲南彝族的伝統祭りである龍祭りを取り上げ、その特徴や意義について分析した。龍祭りは彝族文化の核心的な儀式であり、その信仰が長い歴史的背景を持つことを明らかにした。さらに、龍の信仰は彝族と他民族の橋渡し役を担い、中国国民全体のアイデンティティの形成にも寄与していると述べられていた。③①では、狩猟が単なる生存手段にとどまらず、狩猟の神への崇拝は、自然界との相互作用の中で形成された独自の文化的特徴であり、霊的次元をも含む文化であると指摘されていた。

近年では、彝族伝統信仰に加え、新たな民間信仰が形成されている例として、②④は「車の神」信仰が挙げられ、新たな信仰対象である「車の神」の存在と祭祀儀礼が考察されていた。雲南省峨山彝族自治县塔冲村の調査では、自動車や農業機械の普及を背景に、安全祈願を目的とする「車の神信仰」が発展したと報告されていた。塔冲村では、伝統的に祖先崇拝や自然神信

仰が中心だったが、現代に入り、自動車や農業機械が普及するにつれ、車の神信仰が新たに発生した。これは、村民が車の安全を願い、事故を避けるために行われる儀式で、車に赤い布をかけたり、五穀を撒いたり、彝語で祝詞を唱えたりするものであった。また、車の事故が起きた際には、車の神に祈りを捧げ、災難を回避するための儀式が行われ、不幸や交通事故が発生した際には、霊的な介入の影響と見なされることがある。運転手は畢摩による魂を呼び戻す儀式を行い、穢れを払い、悪霊を追放し、神々の祝福を求めることによって災難を避けようとする。交通事故に対する恐怖と、平安への願いから新しい「車の神信仰」という民間信仰が生まれたと述べていた。

4 2013～2024年5月現在

文献数は20件で、彝族の民間信仰に関する包括的な分析を行い、彝族の信仰体系を全体的に理解することを目的とした研究が4件、特定の民間信仰に関する研究が16件あった。

③④は文化伝播の視点から、外来宗教、特に道教と彝族の原始宗教との融合について論じる研究であった。彝族固有の信仰である自然崇拝、トーテム崇拝、祖霊信仰、土主信仰が、道教の教義や儀礼といかに交錯しているかを詳細に分析していた。また、儒教・仏教・道教の三教が霊的存在への民間信仰に与えた影響も示されており、彝族文化と漢族文化の民間信仰が多元的に共存しつつ融合している。この多元的信仰の共存は、地域社会における宗教的調和の一側面を物語るものであると指摘されていた。

④④は中国西南部と雲南省楚雄彝族自治州における民間信仰を対象とした研究で、文化生態学の視点から、雲南省楚雄彝族自治州における彝族の農耕様式と信仰体系の関連性を分析する研究であった。山地に住む彝族が火の崇拝、山の神崇拝、虎の崇拝を信仰の中心としている一方、平地に住む彝族は水稻農業を営み、水の崇拝や龍の崇拝がその民間信仰の特色を形成している。これにより、自然環境や農耕様式が宗教的世界観の形成に及ぼす影響が解明され、地域ごとの文化的多様性が浮き彫りにされていると述べていた。

③⑨、④②は、史詩や民間物語を通じて彝族の民間信仰を考察する研究であった。③⑨は『阿黑西尼摩⁹』を取り

9 阿黑西尼摩は「阿赫希尼摩」とも称され、彝族の神話における世界を創造した万物の母と言われている。

上げ、これが彝族の信仰と文化的伝承の媒介であると指摘していた。中心人物である「西尼摩」は神性と人性を兼ね備えた女性であり、彝族の始祖として崇拝されている。その物語は、彝族の神話や宗教信仰、畢摩文化の精神的核を包括し、民族信仰を通じてその伝統と精神性を伝える役割を担っていると述べていた。④②は、彝族の神話や民間物語が原始宗教的信仰をどのように反映しているかについて詳細に分析していた。

特定の民間信仰に焦点を当てた研究の中で、③③は火の信仰の重要性やその伝承と変遷、さらに火に関わる神話や叙事詩について詳細に分析し、また火祭りに見られる「火一祖先一投」という三要素の象徴的意義についても論じられていた。

③⑤と③⑧は、畢摩が彝族社会で果たす宗教的・文化的役割を論じていた。畢摩文献は、宗教、哲学、歴史、天文暦法など多様な分野を網羅し、彝族文化の全体像を理解するための重要な資料であると述べていた。

③⑥と④⑥は山の神に対する崇拝に関する研究であり、この信仰は彝族原始信仰の基盤であり、自然崇拝の中核的要素であると指摘されていた。③⑥は「迤帕拉村(トーパーラ村)」を事例に、村落、家族、祖先という三つの側面から山の神信仰を考察した。山の神への祭祀は、家庭や村全体の結束力を高める機能を果たし、彝族が重視する「人と自然の調和」を体現するものである。また、「清吉平安(心身が清らかで幸運に恵まれ、平安無事でありますように)」を祈り、神霊や祖先からの加護を求める素朴な願いを反映していると論じられた。

③⑦では、彝族の信仰体系を天神、地神、人祖神という三つの分類で整理し、天、地、水域、地下の神々と祖先神への崇拝が彝族文化の中心を成していることを示していた。

④①、④③、④④、④⑨は祖霊信仰に関する研究であった。④①は祭祀演劇「撮泰吉」の起源を祭祀儀礼に求め、④④は祭祀儀礼の道具「祖霊筒」の形状や製造方法を通じて遊牧文化と農耕文化の融合を論じた。さらに、④③と④⑨では彝族の独自の霊魂観である「三霊観」について解析し、祖霊信仰が生と死、生死の輪廻、魂の永続という抽象的概念に基づくことを示していた。

④⑤、④⑦、④⑩は、彝族の植物信仰に関する研究であった。このうち、④⑤、④⑦は松の木信仰を中心とした樹木信仰に関するものであった。彝族の木への崇拝は、自然に対する敬愛と崇敬の感情が反映された伝統的習俗であるとされる。④⑤は、彝族の木崇拝が持つ多元的文

化的意義と村落統治機能について論じていた。④⑦は楚雄彝族自治州を例に、松の木崇拝の起源、風習、文化的意義を考察した研究であった。また、④⑩は彝族の支系である「密岔人」の植物崇拝に関する研究であり、特定の植物種への崇拝が宇宙秩序、祖先、災厄回避、穀物の神々への信仰を象徴するものであることを指摘していた。

④⑧では、彝族の「諾蘇滄」や「納蘇滄」、「聶蘇滄」など、自称として龍を冠する部族が彝族人口の50%以上を占めることを指摘していた。④⑤は虎を対象としたトーテム信仰の文化的背景について考察し、彝族は虎を強さと権力の象徴として尊重し、祖先及び民族トーテムとして崇拝していると述べていた。④⑨では、彝族の伝統的な神鬼魂信仰を「自己を守る神鬼」、「他者の神鬼」、「自己に属する神鬼」の三つに分類し、これが彝族民間信仰の中核をなすと論じられた。

IV 考察

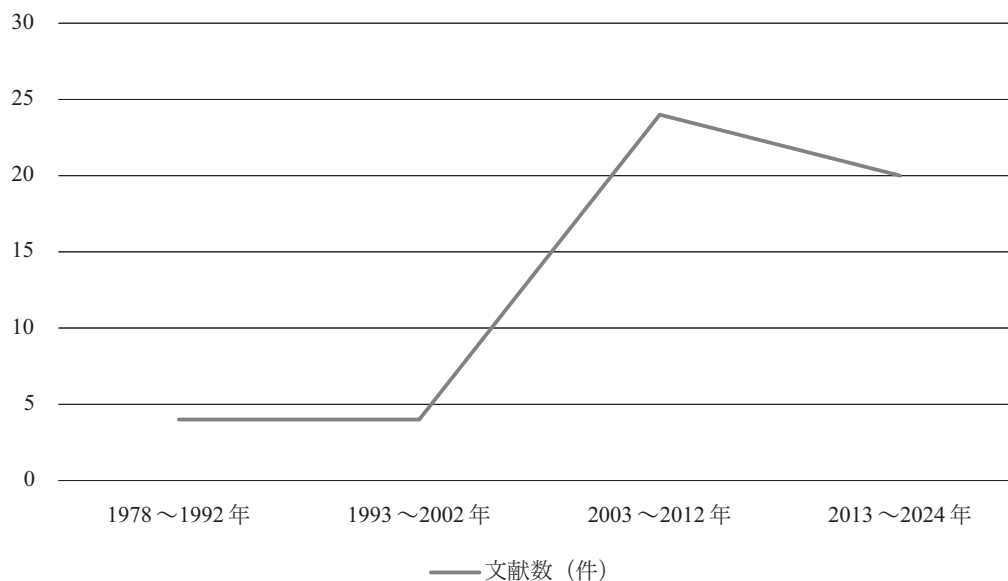
1 民間信仰研究の変遷

本稿では、彝族の民間信仰に関する52の文献を年代順に整理し、1978年から2024年5月現在にかけての研究動向の変遷を以下のようにまとめた。

(1) 民間信仰研究の増加

彝族民間信仰研究の発展は、文献数の推移(表2)に明確に示されている。1992年以前は、文献数がごく少数にとどまり、研究の黎明期と位置づけられる時期であった。しかし、1993年以降、研究数は増加傾向を示し始めた。この背景には、少数民族文化研究の重要性が認識されるようになり、研究活動が徐々に活発化していったことが挙げられる。2003年以降、文献数は大幅に増加し、彝族民間信仰を対象とする研究が多面で進展を見せた。この進展は、中国政府が推進した少数民族文化保護政策や無形文化遺産保護の取り組みと密接に関連していると考えられる。これらの政策は、少数民族文化に対する関心を高め、研究資源の投入を促進する役割を果たした。その結果、彝族民間信仰研究はより精緻化され、多様な視点から深掘りされるようになった。このように、政策的支援と研究者の努力が相乗効果を生み、民間信仰研究は質量ともに大きな発展を遂げたのである。

表2 1980年～2024年文献数の推移



(2) 研究対象の変化

1992年以前の彝族民間信仰研究は、主に伝統的な民間信仰や祖先崇拝に焦点を当てた概括的な研究が主流であった。この時期の研究は、彝族文化全体における民間信仰の位置づけや特徴を明確に把握することを目的としており、信仰体系全体を広範に捉えるアプローチが取られていた。そのため、具体的な信仰対象や儀礼に関する詳細な分析は限られており、研究の焦点は対象の深さよりも、民間信仰の全体像を示すことに置かれていたと言える。1993年以降、従来の広範な概括的研究や祖先崇拝に対する研究に加え、土主信仰や植物信仰といった特定の信仰体系に焦点を当てた研究が登場し、研究対象が次第に細分化された。これらの研究は、大分類にとどまらず、具体的な信仰の実践や象徴的な意味に注目したものである。例えば、土主信仰においては特定の土地に根差した霊的存在の意味が探求された。このような研究の進展は、民間信仰をより詳細に理解し、その多様性を明らかにする重要な契機となった。

2003年以降、民間信仰研究はさらに細分化が進み、研究対象が一層多様化した。火の崇拝、山の神崇拝、天神崇拝、樹木崇拝など、特定の信仰対象が個別に取り上げられ、それぞれの文化的及び宗教的意義が詳細に検討されるようになった。この時期の研究は、従来の大分類からさらに細かい小分類へと分かれ、信仰の地域的特性や社会的背景を考慮した分析が増加している。このような研究の進展により、民間信仰研究は単に広範囲に及ぶだけでなく、対象を細部まで掘り下げ

て捉えることで、信仰体系の全体像を構築する試みが進んだ。例えば、トーテム崇拝の一形態としての虎の崇拝や龍の崇拝をテーマとする研究が挙げられる。これらの研究は、信仰対象の象徴的な意味や文化的背景に焦点を当て、特定の信仰がどのように形成され、社会においてどのような役割を果たしているのかを明らかにしている。このように、民間信仰の研究は細分化を通じて対象を具体的かつ多面的に分析し、実証的データに基づいた理解を深化させている。加えて、研究対象は地域的な特性を踏まえたものへと変化しており、特定地域や個別信仰に焦点を当てた研究も増加している点が特徴的である。また、伝統的な信仰の分析にとどまらず、現代社会の変化に伴う新たな民間信仰への関心も高まりつつある。例えば、現代における都市化が伝統的信仰に与える影響、新たに形成される信仰体系についての研究も進められている。これにより、研究の視点は「伝統」から「発展」や「現代」へと多様化し、民間信仰研究はその射程を広げ続けている。また、他の民族や国との比較研究も見られた。

(3) 研究対象地域の拡大

彝族は中国西南部に広く居住しており、主に雲南省、四川省、貴州省などがその主要な地域である。大規模な集住地としては、四川省涼山彝族自治州や雲南省楚雄彝族自治州が挙げられるが、これらにとどまらず、雲南省紅河哈尼族彝族自治州や巍山彝族回族自治县なども重要な集住地である。さらに、中国各地には「彝族村」や「彝族郷」と呼ばれる小規模な彝族の集住地

が多数存在している。1992年以前の彝族研究は、主に四川省涼山地区に集中していた。この地域は地理的条件や社会制度による閉鎖性が高く、伝統文化が比較的良好に保存されていたため、研究が集中した要因となった。涼山は、彝族の社会組織や祭祀文化の研究において、豊富な資料を提供する地域として注目されてきた。しかし、1992年以降、研究対象地域は四川省涼山地区を超え、雲南省楚雄彝族自治州など他の地域にも広がりを見せた。この時期、少数民族政策の進展や学術的関心の高まりにより、雲南省や貴州省といった他地域への調査が活発化した。また、2003年以降には、涼山や楚雄以外の特定の地域や村に焦点を当てた研究が増加した。例えば、⑰攀枝花市仁和区の「啊喇么村」を対象とした調査や、④貴州省盤県坪地郷での彝族祖先祭祀に用いる法器「祖霊筒」に関する調査が行われていた。これらの研究は、彝族文化の多様性を理解する上で貴重な資料を提供している。中国の少数民族研究者の間では、小規模な彝族集住地に対する関心が高まっていることがわかる。

(4) 研究方法の変容

2002年以前の彝族民間信仰研究は、主に古文書や民族学的資料に基づいて行われていた。しかし、2003年以降、研究方法は多様化し、より実証的で包括的なアプローチが採用されるようになった。この時期には、畢摩經典や「梅葛」に代表される民族史詩、口承文学などの新たな資料が研究対象に加わり、彝族独自の宗教的世界観や歴史的記憶を解明する上で重要な役割を果たすようになった。さらに、アンケート調査やフィールドワークなどの実地調査手法が広く活用され、研究の実証性が飛躍的に向上した。これにより、単なる文献研究にとどまらず、信仰実践の現場に基づいた多層的な分析が可能となった。例えば、特定の地域における祭祀の実態や信仰の社会的機能、地域ごとの文化的特性を直接観察し、記録することができるようになった。このような研究手法の進化により、従来の文献中心の研究では見過ごされがちだった彝族民間信仰の動態的側面や地域間比較が精緻に行えるようになった。結果として、彝族民間信仰の多層的かつ包括的な理解が進み、その文化的豊かさをより深く明らかにすることができるようになった。

(5) 研究視点の変化

2002年以前の彝族民間信仰研究は、主に伝統的な

民間信仰の記述や分類が中心であった。しかし、2003年以降、人類学や生態学といった学際的視点が積極的に導入され、研究の方向性は大きく拡張された。これにより、彝族民間信仰は単なる文化的現象としてだけでなく、社会構造や生態環境との相互作用の中で多角的に分析されるようになった。例えば、人類学的視点からは、儀礼や信仰実践を通じて表現される象徴的な意味や価値体系が詳細に分析され、彝族独自の宗教観や宇宙観が明らかにされている。さらに、生態学的視点を導入することにより、彝族の自然崇拜が地域の生態環境との相互依存関係の中でどのように形成され、維持されているのかが明らかにされつつある。

2 問題点

彝族の民間信仰に関する研究は、これまで多くの蓄積があるものの、その分析視角や方法論には一定の偏りが見られる。特に、文化人類学のアプローチの導入は十分とは言えない。その背景には、フィールドワークの実施の困難さ、研究対象地域へのアクセスの制約、さらには研究者の関心の偏りといった要因が関与している。しかし、近年の社会変化や文化変容の動向を踏まえると、より精緻な現地調査に基づく研究の必要性が高まっている。文化人類学は、民族自身の視点を尊重し、固定的な枠組みにとらわれない分析を可能にする学問である。口承伝統や宗教儀礼の記録を通じて民族文化への理解を深めるとともに、その変容の過程を多角的に探求する手法を提供する。このようなアプローチは、中国の少数民族研究において、文化の多様性と変容を包括的に理解するための強力な手段となる。さらに、文化人類学的視点は、政策立案や文化保護といった実践的領域にも貢献し得る。したがって、少数民族研究において文化人類学の視点を取り入れることは不可欠である。本稿では、文化人類学の視点から、従来の研究に見られる問題点を分析し、その課題を明らかにする。

(1) フィールドワークに基づく研究の不足

現在の研究の主流は文献に基づくものであり、彝族の日常生活や社会構造、文化的習慣を直接観察し理解するためのフィールドワークは依然として不足している。52件の先行研究の中で、フィールドワークを基盤とするものはわずか6件にとどまる。このことは、実地調査による貴重なデータや洞察が十分に活用されていない現状を示している。

フィールドワークは、彝族社会の内部視点を把握し、地域間の比較や文化的変化の過程を追跡する上で不可欠である。特に、民間信仰が実践される具体的な状況や、それが社会構造や個々の生活にどのような影響を及ぼしているかを理解するためには、現場からのデータ収集が重要である。今後の研究では、フィールドワークに重点を置き、実地観察を通じて信仰の実態やその文化的背景をより深く解明することが求められる。

(2) 信仰の深層的意義と変遷の分析不足

これまでの研究では、彝族の民間信仰に関する基本的な説明や儀礼の進行方法に関する記述が一定の成果を挙げているものの、個々の信仰が持つ深層的な意義やその変遷、変容に関する詳細な分析は不十分である。個別の信仰が地域社会や個々人にとってどのような意味を持つのか、その文化的背景や象徴的な役割について、より包括的で精緻な研究が必要である。将来的には、個別信仰の詳細な分析と民間信仰全般の包括的研究の両方が重要な課題となるだろう。これにより、彝族の信仰の多様性と複雑性をより深く理解することが可能となる。特に、信仰の深層的な意義を掘り下げ、その変化のプロセスや具体的な実践の細部に焦点を当てることが求められる。例えば、儀礼の場における参加者の役割や、社会的文脈における信仰の機能、さらには現代化の影響を受けた信仰の変容についての詳細な検討が不可欠である。

(3) 研究対象地域の偏り

彝族に関する研究は、その居住地域において偏りが見られる。特に1992年以前の研究では、四川省涼山地域に集中していた。1993年以降、雲南省楚雄地域を対象とした研究が増加し、研究の地域的広がりが一定の進展を見せた。しかし、涼山や楚雄以外の西南地域には多くの「彝族自治县」や「彝族村」が存在しているにもかかわらず、これらの地域に関する研究は依然として不足している。彝族は中国南西部に広く居住し、生業や居住環境の違いにより、それぞれの地域で独自の文化的特徴を形成している。このため、特定地域にのみ焦点を当てた研究では、彝族全体の文化的多様性や地域特性を包括的に理解することは難しい。

彝族文化の多様性と地域特性を深く理解するためには、雲南省、四川省、貴州省を含む広範な地域での調査や比較研究が必要不可欠である。特に、小規模な彝族集住地における文化的実践や信仰の詳細を記録する

フィールドワークは、地域間の文化的差異を明らかにし、彝族文化の全体像をより立体的に捉えるための重要な基盤となる。

(4) 近年の社会変化に伴う民間信仰の変容に関する研究不足

近年の中国社会全体の急激な変化に伴い、彝族の生活様式や宗教信仰も大きな変容を遂げつつある。都市化、経済発展、人口移動などの要因が、伝統的な民間信仰に大きな影響を与えている一方で、新たに形成された民間信仰も現れ始めている。しかし、伝統的な民間信仰の変容や、現代社会において誕生した④に挙げられた「車の神」のような新たな信仰形態の研究はまだ十分に進んでいないのが現状である。

こうした信仰の変容に焦点を当てた研究は、彝族文化の現代的側面を理解する上で急務であると言える。具体的には、伝統的信仰がどのように変容し、現代社会に適応しているのか、また新たな信仰形態がどのような社会的背景や機能を持っているのかを明らかにする必要がある。この分野の研究は、彝族文化の持続可能性や変化のダイナミクスを理解する上で重要な意義を持つだけでなく、少数民族の現代化に伴う文化的課題を包括的に検討するための基盤ともなるであろう。

3 今後の課題と展望

本稿では、これまでの研究動向の変遷とその問題点を分析した上で、文化人類学の視点から今後の研究課題について考察を行った。その結果、今後の課題として以下の点に取り組む必要があると考える。

第一に、調査方法においては、フィールドワークを重視するアプローチが求められる。従来の文献資料の分析に加え、彝族の居住地に直接赴き、参与観察を通じて文化の実態を把握することが不可欠である。例えば、口承文学や、畢摩經典などの民族文献を活用し、それらが実際にどのように社会生活や信仰実践に結びついているかを検討する必要がある。さらに、研究の対象地域を広げることも重要である。これまで広く研究されてきた涼山や楚雄といった地域だけでなく、十分に研究が行われていない小規模な集住地や多様な地域特性を持つ場所にも目を向ける必要がある。地域特性を踏まえた包括的な研究アプローチは、彝族文化の多様性を解明する鍵となるであろう。特に、小規模な集住地における儀礼、信仰、生活様式に焦点を当てた詳細なフィールドワークは、彝族全体の文化的特性を

立体的に理解するための重要な手がかりとなる。これにより、彝族文化の形成過程や地域間の文化的相違を明らかにすることが可能となる。

第二に、研究対象においては、現代社会の急速な変化や生存環境の変化が伝統文化に与える影響を考慮した分析が求められる。具体的には、従来の伝統的な彝族民間信仰に加え、現代化や都市化の進展に伴い変容した信仰形態や、新たに生じた民間信仰にも注目する必要がある。これにより、彝族文化の伝統的側面と変化のプロセスを包括的に理解することが可能となる。特に、現代における都市部での彝族コミュニティや若年層の信仰実践における変容の分析は重要である。また、新たに形成された信仰形態や、外部文化との接触による伝統文化の再編についての研究は、彝族文化の適応力や動態的特性を解明するための重要な課題である。

以上の課題を踏まえ、中国の少数民族研究は、文化の動態と多様性をより精緻に捉える方向へと発展していくことが求められる。文化人類学的アプローチを強化し、現地の視点を尊重した研究を進めることで、少数民族の社会と文化に関する理解を深めるとともに、学術的にも新たな知見を生み出すことが可能となる。

V おわりに

彝族の民間信仰は、トーテム崇拜、祖先崇拜、自然崇拜といった多様な信仰体系が複雑に絡み合い、独自の文化的文脈の中で発展してきた。本稿では、1978年から2024年5月現在までに発表された彝族の民間信仰に関する52編の論文を年代別に整理し、これらを基に研究動向の変遷を分析するとともに、先行研究の問題点を明らかにし、今後の研究課題を提起した。彝族を事例とすることで、中国少数民族の民間信仰研究の発展と変遷を検討し、さらに研究上の未解決課題を浮き彫りにした。改革開放以降、中国では政策的支援や社会的関心の高まりを背景に、少数民族文化や民間信仰研究が着実に進展してきた。一方で、研究手法の偏りや特定地域への集中、現代社会の変化がもたらす新たな課題が依然として残されていることも確認された。

今後の研究では、以下の点に重点を置く必要がある。まず、フィールドワークを重視した調査方法の導入である。既存の文献研究に加え、現地調査を通じて得られる生のデータは、少数民族文化の実態を立体的に理

解する上で欠かせない。また、調査対象地域は特定の地域に限定せず、未研究の小規模な集住地や多様な地域特性を持つ場所にも広げることが重要である。さらに、伝統的な信仰形態の変容に加え、現代の社会変化によって新たに形成された民間信仰にも注目する必要がある。例えば、都市化や現代化の影響下で生まれた新たな儀礼や信仰実践についての調査は、少数民族文化がどのように適応し進化しているのかを理解する鍵となる。これにより、伝統と変化の双方を包括的に捉え、少数民族文化の動態的な側面を明らかにすることが可能となるであろう。

本稿が、彝族に限らず、少数民族の民間信仰研究全体に新たな知見を提供する一助となることを願う。本稿を通じて、少数民族民間信仰に対する学術的な関心がさらに高まり、今後の研究が一層充実したものとなることを期待している。少数民族の民間信仰研究のさらなる発展に寄与することを期待したい。

参考文献

(日本語文献)

今井 義忠

1940 「民間信仰としての縁起」『心理学研究』15(4): 305-330。

桜井 徳太郎

1966 『民間信仰』塙書房。

1968 『神仏交渉史研究——民俗における文化接触の問題』吉川弘文館。

1970 『日本民間信仰論 (増訂版)』弘文堂。

直江 広治

1987 『民間信仰の比較研究——比較民俗学への道』吉川弘文館。

堀 一郎

1971 『民間信仰史の諸問題』未来社。

(中国語文献)

鮑 惠新

2007 「彝族民歌中的原始宗教信仰」『雲南財貿学院学报 (社会科学版)』(01): 17-18。

蔡 富蓮

2011 「凉山彝族民間信仰中的少女鬼——“妮日”」『宗教学研究』(03): 159-164。

陳 永香

2002 「論彝族的火崇拜」『楚雄師範学院学报』(02): 56-56。

2006 「彝族史詩“梅葛”所見的原始宗教信」『宗教学研究』(04): 140-145。

陳 永香, 吳 永社

2006 「論彝族的山神崇拜」『楚雄師範学院学报』(02):

- 66-72。
- 单 江秀
2016 「文化生態視野下楚雄彝族的耕作与信仰」『楚雄師範學院學報』31(11): 84-91。
- 高 金和, 李 小梅
2015 「永仁彝族的山神信仰——以永仁県迤帕拉村為例」『牡丹江大學學報』(8): 168-170。
- 国家民族事務委員會・中共中央文獻研究室編
1990 『新時期民族工作文獻選編』北京: 中央文獻出版社。
- 何 耀華
1983 「試論彝族的祖先崇拜」『貴州民族研究』(04): 153-168。
- 花 家濤
2013 「彝族村寨火把節“火——祖——捧”的文化解讀」『上海體育學院學報』37(01): 67-70。
- 黄 河
2003 「試論彝族神話与原始宗教」『昆明大學學報』(02): 21-24。
- 黄 龍光
2010 「試論彝族火神話与火崇拜」『畢節學院學報』28(01): 25-31。
- 吉差 小明
2016 「彝族典籍『阿黑西尼摩』的宗教信仰」『湖北函授大學學報』29(21): 188-189。
- 李 亦園
1992 『文化的圖像(下卷)』台北: 台北允晨文化事業股份有限公司。
1996 『人類的視野』上海: 上海文芸出版社。
- 李 金甯
2011 「浅析彝族村寨中的“車神”信仰」『學理論』(36): 174-175。
- 李 開春, 楊 甫旺
2018 「神性与世俗: 彝族山神崇拜与生態保護——以雲南縣華彝族山神崇拜為例」『西昌學院學報(社會學版)』30(02): 11-14。
- 李 世康
2008 「論彝族天神」『楚雄師範學院學報』(08): 58-63。
- 李 小燕, 高 樂坤
2017 「彝族祖靈筒与祖靈信仰探析——以貴州盤縣坪地鄉彝族鄉為例」『貴州工程應用技術學院學報』35(05): 49-53。
- 栗 小寧
2019 「彝族虎图腾崇拜及其背后的文化邏輯分析」『文化學刊』(6): 119-120。
- 廖 玲
2012 「談彝族史詩“梅葛”与彝族宗教」『宗教学研究』12(03): 230-236。
- 林 美容
1991 『台灣民間信仰研究數目』北京: 中央研究院民族學研究所。
- 岭 光電, 余 宏模
1982 「涼山彝族的原始宗教信仰」『貴州民族研究』(03): 135-147。
- 劉 源泉
2014 『中國共產黨少數民族文化政策研究』北京: 人民出版社。
- 劉 榮昆
2017 「彝族樹木崇拜的多元文化意涵及其鄉村治理功能」『貴州師範大學學報(社會科學版)』(06): 47-53。
- 劉 禎, 蘇 濤
2016 「撮泰吉: 祭祀化的祖先崇拜与形象化的彝族生命史詩」『遺產与保護研究』1(06): 62-67。
- 劉 忠良, 鄒 明輝
2008 「俚濮彝族原始宗教信仰調查——以啊喇么村為個案」『攀枝花學院學報』(02): 29-32。
- 龍 保貴
2011 「彝族原始宗教神枝文化略考」『畢節學院學報』29(11): 38-44。
2015 「試析彝族傳統神靈系統及其文化特点与特質」『貴州工程應用技術學院學報』33(06): 41-47。
2022 「彝族傳統神鬼魂信仰及其文化意蘊」『楚雄師範學院學報』37(06): 93-100。
- 羅 巫研
1991 「彝族血崇拜刍議」『貴州民族研究』(04): 50-53。
- 羅布 木呷, 王 靖
2014 「涼山彝族畢摩文化傳承現狀的調查与思考」『文山學院學報』(37): 41-47。
- 羅 國榮
2009 「彝族“羅羅”虎崇拜与民族精神」『畢節學院學報』(27): 27-30。
- 洛迦 木果, 沙馬 打各, 吉木 阿龍
2008 「支格阿魯文化中的宗教信仰」『西昌學院學報』(社科版) 20(04): 97-101。
- 呂 大吉
2010 『宗教学通論新編』北京: 中国社会科学出版社。
- 馬 廷中
2000 「彝族古代原始宗教信仰淺論」『貴州文史刊』(01): 37-42。
- 牛 軍
2003 「彝族的死亡觀与祖先崇拜」『民族芸術研究』(03): 48-54。
- 潘 興德
2015 「畢摩文化对当代彝族人信仰的影響」『人民論壇』(17): 207-209。
- 曲比 阿果
2009 「涼山彝人火文化的傳承与變遷」『西南民族大學學報(人文社科版)』30(06): 53-57。
- 商 宇宏
2019 「微觀視角下的彝族小眾支系信仰文化——彝族密岔人植物崇拜遺跡調查研究」『貴州工程應用技術學院學報』37(06): 54-59。

施 麗娜

2012 「浅析滇南彝族的传统节日——祭龍」『佳木斯教育学院学报』(02): 62。

蘇 斐然

2016 「彝族民間故事中的信仰文化述略」『楚雄師範學院学报』31(08): 46-51。

王 銘銘

1997 『社会人類学与中国研究』北京：生活·讀書·新知三聯出版社。

吳 秋林, 郎 麗娜

2016 「彝族宗教“三靈”研究」『宗教学研究』(04): 151-158。

徐 銘

1990 「凉山彝族祖先崇拜及其社会功能」『西南民族学院学报(哲学社会科学版)』(2): 19-23。

顏 麗花, 趙 岩社, 張 小娜

2009 「彝族祭祖儀式及社会功能」『懷化学院学报』28(09): 11-13。

楊 慶堃

2016 『中国社会中的宗教：宗教的現代社会功能与其歷史因素之研究』範麗珠(訳) 成都：四川人民出版社。

楊 甫旺

2002 「口頭神話与民間信仰——雲南彝族馬櫻花神話個案研究」『柳州師專学报』(04): 127-130。

2007 「彝族土主崇拜研究」『雲南師範大學学报(哲学社会科学版)』(01): 49-55。

2011 「論彝族魂鬼觀念」『宗教学研究』(01): 161-165。

2013 「文化傳播視野中的彝族宗教信仰」『宗教学研究』(02): 151-156。

楊 甫旺, 李 娜

2012 「論彝族獵神崇拜」『宗教学研究』(2): 243-247。

楊 海燕

2018 「彝族松樹崇拜及其文化意義——以楚雄彝族自治州為例」『文物鑑定与鑑賞』(10): 60-61。

殷 鷹

2018 「簡論彝族民間信仰中的龍崇拜」『楚雄師範學院学报』33(05): 127-133。

余 立梁

1999 「試論楚雄彝族的土主崇拜」『楚雄師專報』(04): 90-95。

『彝族簡史』編写組(編)

2009 『彝族簡史(修訂本)』北京：民族出版社。

張 純德

2007 「彝族原始宗教再認識」『畢節学院報』(03): 19-22。

張 毓雄, 姚 順波

2011 「彝族民間信仰中森林文化的認同与差異——基于貴州農村460份調查問卷分析」『湖南科技大学学报(社会科学版)』14(04): 102-108。

張 澤洪

2011 「中国西南彝族宗教祖靈崇拜及多元信仰体系」『宗教学研究』(04): 186-192。

趙 毅衡

2002 『符号学原理与推演』南京：南京大学出版社。

趙 蕤

2012 「万物有靈和祖先崇拜——中国彝族与日本靈魂觀比較」『貴州民族研究』206: 73-77。

鄭 志明

2009 『傳統宗教的文化詮釋——天地人鬼神五位一体』北京：文津出版社。

中共中央党史研究室

2011 『中国共产党歷史第二卷(1949-1978) 下冊』北京：中共党史出版社。

鐘 敬文

1998 『民俗学概論』上海：上海文芸出版社。

周 芸芳

2018 「彝族宗教祖靈觀的文化分析——以当代彝族詩歌為中心」『宗教学研究』(01): 161-166。